

青いみかん

お店の果物売り場に青いみかんが並ぶ季節になりました。それを見るたびに、私は小学校三年生の運動会を思い出します。

予行練習の日のことでした。

「ひろ子、今年の運動会はこれを着て我慢して」

母は兄の古い下着のシャツを出して言いました。私は「嫌だなあ」と思いましたが、しかたがないのでそれを着て登校しました。

友達はみんな新しい体育着を着ていました。

先生は何もおっしゃらなかったけど、友達からは、

「ひろちゃん、それ体育着とちがうね」

「どうしたの。体育着ないの」

と言われました。

私はもう恥ずかしくて、悲しくて、泣きながら走って家に帰りました。

突然、泣いて帰ってきた私を見て、母は驚いたようでしたが、何も聞きませんでした。そして、

「ひろ子、もう一度母ちゃんと学校に行こう」

と、私の手を引いて学校へ行きました。

少し離れていたのが聞こえませんでした。母は先生に何かを話し、何度も何度も頭を下げながら家に帰っていきました。私はその後ろ姿を今でもよく覚えています。

運動会の朝でした。私の枕元には真新しい体育着とおにぎりの包み、それに青いみかんが一つ置いてありました。

「母ちゃん！」

私はそれを抱いて母を探しましたが、母はもう働きに出かけていていませんでした。

お昼に食べた青いみかんの甘酸っぱい味は、その日から母の味になりました。

父を早くになくした私たち家族。三人の暮らしを女手一つで支えていた母

でした。あの体育着を母はどんな気持ちで買ったのだろう…、それを思うと今でも心が痛みます。

母は私たちを育て、三年前になくなりました。

貧しい暮らしでしたが、「ひろ子が小学校の先生になるなら、大学へ行かせにやらん」とまた張り切って働いて…、働き通した母の一生でした。

「今度は母ちゃんが楽をする番だ。働き通しの母ちゃんを休ませたい」と思っていたのに、もうそれもできません。

真っ白な体育着を着て校庭を無邪気に走り回る子どもたちを見ると、甘酸っぱい青いみかんの思い出とともに、「よし、またがんばろう」と、新たな気持ちがわいてきます。

(後藤 忠)

この話はフィクション半分、ノンフィクション半分の話です。幼馴染みのKちゃんのことをベースになっています。(Kちゃんは東京で大成し、ちよつと名の通った水産会社の社長になりました。)

この話は平成五年に手がけたものですが、その時は「暗い！」という理由で没になりました。しかし、どうにも捨てがたく、今までずっと持っていたものです。

今回改作するに当たり、留意したことが二点あります。

- ① 結末をブラックエンドにしたくない、希望あるものにした。
- ② 時代背景などについての解説はせず、心情描写は最小限に止める。

この話を今の時代を生きる子どもたちの心に映したい。たとえ時代が変わり、生育環境が大きく変化しても、親の無償の愛、親に対する感謝と畏敬の念といった日本人の価値観の根底に流れているものは変わっていないに違いないと思ったわけです。

さて、今の子どもたちの心に響くでしょうか…？